

## 植物学者郡場寛博士の履歴 (5) 昭南植物園 (2)<sup>1)</sup>

山内 智<sup>2)</sup>

On the Record of a Botanist Dr. Kwan Koriba. (5)  
The Shonan Botanical Gardens (2)

Satoshi YAMAUCHI

Key words : 郡場寛, 植物生理学, 昭南植物園

### 1. はじめに

郡場寛博士 (1882-1957) は、青森市出身の著名な植物学者である。1942年に京都帝国大学退官後、陸軍司令長官 (陸軍中将相当待遇) として昭南特別市 (現シンガポール) の昭南植物園長に就任した。

郡場寛の先輩で東京帝国大学植物学科時代に同教室で一緒だった早田文蔵は、植物学雑誌に連載した「欧州紀行」(早田,1910)の中でシンガポールの島々を見て「植物学者ノ楽園ナリ」とその自然豊かさを賞賛している。このことは同教室で郡場寛も直接聞き及んでいたと推測される。明治後期のシンガポールは日本の研究者からその自然の豊かさから評価が高く、あこがれの地であったと思われる。

郡場寛の就任のいきさつ等については山内 (2009, 2010) 等が詳しくまとめた。昭南特別市や昭南植物園の様子については、E.J.コーナー (1982) が、当時の植物園職員の動向等については、著者不明ながら同園の研究紀要 *Gardens' Bull. Singapore* (Anonymous,1947)にそれぞれまとめている。特にこの研究紀要には郡場寛の就任について "In December 1942 Professor Kwan Koriba, Professor of Botany at the Imperial University of Kyoto, was appointed Director of the Gardens." と好意的に紹介されており、更に植物園での研究内容について "Professor Koriba himself carried out a research into the growth-behaviour of some Malayan trees."と記述されている。また郡場寛に対する謝意も最大の敬意をもって述べられている。郡場寛の研究対象となった一つの木 (カボック) は、現在も Dr.Koriba の木として同植物園腊葉館裏手に樹高 40m ほどの大木となって残っている。なお、郡場寛をはじめ日本人の研究者の功績については E.J.H.Corner (1946) が述べている。しかし、戦時中の植物園の植物などについての報告は少なく、上記文献や郡場寛の遺品の調査ノートから山内 (2010) がその一端を述べているが、その植物配置関係等について明細な記録はあまり多くは知られていなかった。

郡場寛の遺品の中から、他の原稿と共に昭南植物園を解説した原稿が見つかった。この原稿は書類や原稿が保管されていた書類棚の中から見つかったもので、アメリカの用紙規格フォリオ版用紙 9 枚と地図 1 枚でクリップでまとめられ、ペン書きに鉛筆書きの訂正・加筆が見られる。原稿のタイトルには「昭南植物園案内」と書かれているが、折り曲げた原稿の裏に「植物園史」と書かれている。地図は「昭南植物園畧図 (昭和 20 年 1 月現在)」と書かれたガリ印刷で、鉛筆書きで場所が区分され I ~ IX の番号が記入されている (図 1)。原稿の内容は植物園の沿革と園内を 9ヶ所に区分して、各区分毎に植物の配置などを具体的な植物名をあげて書かれている。これは、山内 (2010) が詳しく述べた昭南植物園の植物調査の 3冊のノートに書かれていた園内区分と同じで、このノートに記述された調査結果を基にして本遺品の原稿が執筆された可能性が高い。また、同封の地図の年月日などから昭和 20 年 1 月以降に記述したと考えられるが、敗戦後引き上げ (昭和 21 年 1 月) の前か後かは不明である。

郡場寛の著作目録が詳しく掲載されている芦田譲治 (1943)、郡場寛博士古稀記念論文集 (1952) の 2 編の目録の中に本原稿に該当する論文は見当たらない。また、他界後に遺稿をまとめて刊行された郡場寛先生遺稿集刊行会 (1958) の著作目録にも掲載されていない。このことから、「昭南植物園案内」の原稿はまだ公表されていないものと考えられる。当時の昭南植物園の植物の明細な配置などを知る日本人科学者が記録した資料として唯一のものと考えられることから、今回全文を掲載することとした。

ここに郡場寛資料を一括して青森県立郷土館にご寄贈いただいた郡場是行氏、郡場央基氏、資料寄付にご尽力頂き、本報告についての教示・査読をいただいた弘前大学医療技術短期大学部名誉教授千葉滋男氏並びに関係各位に心から感謝する。

1) 郡場寛博士コレクションに関する調査研究 (8)、青森県の自然誌に関する調査研究 (26)

2) 青森県立郷土館 総括副参事 (学芸課長事務取扱) (〒030-0802 青森市本町 2 丁目 8-14)

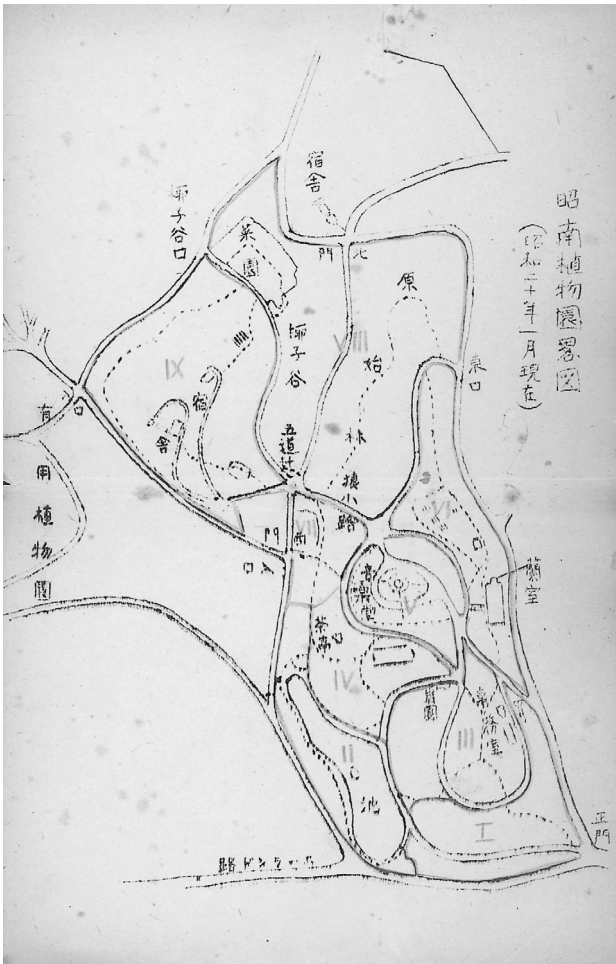


図1. 昭南植物園畧図 (昭和20年1月現在)

## 2. 「郡場寛書 昭南植物園案内」

昭南植物園案内として、郡場寛の直筆原稿は以下のとおりである。なお、旧仮名使い、現在使用されていない和名等もあるが、できるだけ原文そのまま記述した。文字が書かれていない部分は○とした。

### 『 昭南植物園案内

#### 位置と大きさ

昭南植物園は市の中央から約三哩、正門はオルチャード路とタン格林廻路を経てホーランド路に到る少しく手前に在る。園の入口は正門の外に尚ほ東側に事務所口と東口、北には北門と椰子谷口、西には西門がある。園の廣さは東西は所により三百乃至五百米、南北千余米、面積八十英反余 (約三十九町歩)、外に園丁宿舎地約十英反がある。

#### 沿革

新嘉坡が英国により開港されたのは文政二年 (西暦一八一九年) であるが、其後三年ラッフルス総督は早くも植物園を當時の官邸に近い今の博物館附近に開設し、丁香、肉豆蔻、珈琲其他を試植した。然し氏は翌年此地を去ったので植物園も七年にして廢された。而かも此地は

市民散索の地に乏しいので植物園建設の聲が高く、以前の植物園を復活しやうといふ企もあつたが成立たず、斯くして過ぎること三十一年、安政六年 (一八五九年) 時の総督キアバナウ氏の肝入により農業園藝協會が新たに結成せられ、政府は之に五十六英反の土地と勞役とを提供して植物園の計營を依頼し、現在の地に之を設けて散索慰安見學の地たらしめたのである。

園の北半は昔ながらの原始林、南半は當て耕作放棄された叢地であつたが之を開墾し丘陵起伏する芝地本位の庭園とし、道路も大体现状に近い散索迂回路とし諸所花壇を設け、又南西隅の低地には突堤を築き土を掘取つて池とし、北西には更にタイヤサル路に達する二十四英反の土地を購入し宿舎をも建てた (慶應三年、1867)。

園の計營は協會費で賄ひ、草花や蔬菜を會員に配給し、毎月定期の演奏をも開始し、又時々花卉展覽會を開いて園藝趣味の鼓吹に努めた。然し業務の進展するにつれ協會費では到底持切れなくなり、明治七年 (一八七四年) 遂に政府に移管されるに到つた。其後動物園をも兼ねたが之は後約三十年で漸次廢止された。

明治の初年頃から英領植民地其他熱帯各地の有用植物が輸入されて、芝地の各所に配せられ又馬來植物の採集移植研究も進められ、各地の植物園と種子苗木の交換も行はれた。明治十年にはパラゴムの苗木が二十二本英国から到着し園外北側の軍用地に試植された。此軍用地は大部分叢地で一部は苗圃に使用されて居たが明治十二年 (一八七九年) ブキテマ路に到る迄の約百英反が政府から正式に植物園に移管せられて、有用植物園となり、開墾の手を廣めてパラゴム、グタペルチャ、サゴ、珈琲其他各種の有用植物の植栽に当てられ又分類樹木園も作り始められた。而してパラゴムの産出を激増させた新採液法は本園で創始されたのであり、また其頃當園からは毎年パラゴムの種子十数万個、苗木数千本を各地に供給し、斯くして馬來のゴム園が出来上つたのである。当時本園は実に馬來農林業指導の中心地であつた。然るに大正十四年 (一九二五年) 計營四十七年で遂にラッフルス大學の敷地となり、由緒あるゴムの親木も切倒され、只園丁宿舎地のみが其俣園に附属して殘された。

昭和十七年二月十五日、新嘉坡陥落と共に本園は殆ど戦禍なく富部隊に接收せられ、昭南特別市の管下に入つて今日に及んで居る。而して園の西隣に在るサルタナ其他を含む約八五英反の使用が認められ、既に薬用纖維染料植物等の試植が進められ、将来は有用植物本位の典型的な植物園とする予定である。

昭南植物園には尚ほブキテマ原始林一六四英反、パンダン海水林一三七四英反及びクランジ海水林五三英反が保護林として附属し、此等は熱帯植生を表現する典型的な群落である。

#### 園内概観

正門を入ると道は池の東側を過ぎ右方へ迂廻し、東方

に行当って左右に分れ、左方は音楽堂の丘に通じ、右方は事務所輪道となる。輪道の向側には事務所、腊葉館、工作室がある。但し事務室を訪ねるには正門よりも其北の事務所口から入る方が近道であり且つ此口からは音楽堂へも真直に行かれる。

音楽堂の右下には蘭室がある。又音楽堂の外輪道から左奥の猿小路を行くと猩々椰子の立つ五道の辻となり、此所からは北門、椰子谷口、宿舍及西門への道となる。猿小路から北門道の東方一帯は原始林である。

園内には道路が行互って居り其間に池建物などが散在するから此等を目標にして大体地域の区分が出来る。今園内を便宜九地域に分け、更に此各々を細別して所在植物の説明に使じやう（附図参照）。

I	正面附近	南垣根	正面前	東垣根
II	池と周囲			
III	事務所附近	輪道内	池東部	
IV	池の上	東北斜面	茶亭附近	段丘
V	音楽堂附近	外輪	内輪	
VI	蘭室附近	蘭室	苗圃	
VII	西門附近	東西圃場	西門南部	
VIII	北門附近	椰子谷	菜園	原始林
IX	宿舍附近	宿舍道路間	宿舍奥	

## I 正門附近

正門を入ると道の左方には南垣根に沿ふた地区、道路の右正面には正門前の地区、右には東垣根に沿ふた地区がある。正面前と東垣根の両地区は南洋杉の並木道で界せられ轍の跡がある。

### 1 南垣根

手前に宝冠木、其向ふにはサゴヤシと扇芭蕉の叢がある。サゴは東印度諸島の川岸其他の濕地に廣く分布し地下の側芽で繁殖して叢をなす。莖から多量の澱粉が採れ、葉はアタブ屋根になるので村落にもよく栽培される。扇芭蕉は旅人木とも言はれ、マダガスカルでは葉鞘の間に溜った水が旅人の渴を醫するさうである。此所を過ると果樹のランバイとランブタン、稍々離れて日本にもあるカジマルが気根を沢山垂れて居る。此外、油椰子の原始的な品種其他の椰子類もある。路傍にはハナナスビが紫の花を咲かせて居るが之はブラジルでは開墾地の雑草である。其奥にはクス、低濕な所にはハネセンナ、池の近くにはインドゴムノキ、キデマリサイカチなどがある。

### 2 正門前

見渡たすとイカタカヅラとカンナの様々な品種が色とりどりに咲いて居り、其上には木麻黄の数種、更に南洋杉の数種が並木をなして居る。木麻黄（馬來名 ルー）は濠州原産であるが、印度東部から太平洋諸島迄海岸砂地に森林の第一線をなし、生長は速いが材は堅く樹皮からはタンニンが採れ下痢止にも用ひられる。南洋杉属は現今濠州と南米とに残存する古代の松柏類である。此地区には其他黄金竹、ザンジバル、コパルノキ、サクラノ

ウゼンなどもある。サクラノウゼンは落葉後桃色の花を咲かせ合辨漏斗形であるが遠くからは櫻を想はせる。

### 3. 東垣根

正門の右にアメリカネムが枝を擴げ其枝には鳳凰蘭其他の着生植物が沢山着いて居る。其から樹皮の赤く滑かな蕃龍眼、横枝が5米位迄羽根の様に伸びるナガハネシダレの両樹が立ち並び、南洋杉の並木に近くシロヨナ、事務所輪道に沿ふてはロダムノキ、マルバアヲギリ、チーク、アメリカアヲギリ、丈の高いオホイナゴノキ、工作室附近にはシラキノウゼン、タガヤサン、タコノキ、東垣根に沿ふてはビハ、南洋榲、其内側にはバオバブノキ、パラゴムノキ、テリハボク、ハネバマキなどがある。

チークは緬甸や東爪哇では落葉樹で成育もよいが、昭南では乾燥期が無いので常緑となり成育は却て良くない。枇杷は花は咲くが実が成らず、南洋榲は園内のはまだ小さいが郊外貯水池附近の二次林では旺盛な發育をなし年中伸び續け花も絶えず果実は蝙蝠に食はれて散布する。バオバブノキはアフリカ原産で幹は時に直徑三十尺にも達するが、昭南では矢張發育不良で花も稀に見える丈である。

## II 池と周囲

池の面積は四英反餘、睡蓮が密生し赤桃白の外にアフリカ産の紫とメキシコ産の黄とがあり、赤白は午前中、紫と黄は昼頃開く。池の中島には糸筋椰子（ニボン）、タコノキ、ヘリコーニヤ、シクシャ等がある。ニボンは幹が硬く弾性強く、且つ海水に耐え若芽は美味である。

池の南側にはナンヨウアカウの大木があり、垂れた気根が桂状に肥厚して枝を支へて居る。此木には馬末籐の蔓が懸かり先端は樹冠の上面へ突き出て居る。其所から垣根の方にはマホガニー、オホバマホガニーなどがあり、池の西側に進むとゴヘイヤシ、ベニデマリ、タイチリ、シノブバギリ、オホバナサルスベリ、クロバナナツフヂ、大風子、ホノフハカマカヅラ、タカフトモモ、ツツミバノキ、ゲリス、池の岸に沿ふては金芙蓉、黄焰木、キデマリサイカチ、ラフィヤヤシ、オホバストラヤ、水際にはサトイモノキ、水中にはカミガヤツリ、池の東岸にはマンゴーノキ二本立って居るのが見える。

ゴヘイヤシは馬末の林中に自生し刺が多く通過を妨げる。ベニデマリには沢山の種類があり赤色も赤橙黄白様々あり年中花の絶えぬものもある。南支産のものは山丹花と呼ばれる。シノブバギリは熱米産で葉はシノブの様に細裂し花は桐に似て居る。大花猿滑は九ヶ月間隔で大きい脈やかな花を咲かせ幹は滑る程滑らかではない。クロバナ夏藤は深緑濃密な樹冠をなし、年二回開花結実し種子にはサボニンがある。大風子属の木は花は目立たないが大きい球状の果実を結び種子は大風子油を含む。ハカマカヅラ属（菊花木の類）の蔓木は園内所々にあるが皆火焰色の花を咲かせて親木の樹冠を飾る。タカフトモモは葉が肉厚で火災に強く昭南では方々並木になって居

り、花期は年三回で樹冠の表面を白く被ふ。ツツミバノキは年中伸びて黄色い大きな花を咲かせ果実も星形に開いて美しい。葉が大きいので物を包むに用ひられる。金芙蓉は金色の大花を開いて青空に映え落葉後は殊によく目立つ。黄焰木は年二回落葉し新枝に花序を頂生し樹冠の表面を黄色に飾る。キデマリサイカチは鮮黄色の集團した花序を年二回出し花期も長い。ラフィヤヤシは葉の長さ十数米、若葉の表皮を剥ぎ園藝用の紐とする。オホバストラヤはラワン科（二葉柿科）の一種であり此科の樹木には原始林の巨樹が多く南方圏用材の主要なものである。デリスの根はロテノンを含み殺虫剤として有名である。サトイモノキは里芋を木にした様な形で水中から高く伸び出し芋はない。カミガツリはナイル河の原産で埃土では此莖の髓を短冊形に薄く切り連ねて紙の代用とした。

池の北部は林叢となり陰生岩園でリウビンタイ、ヘゴなどの木生羊歯、サトイモ科、クズウコン科其他の陰生植物があり、中にも目珍しいのはナガヒゲサウである。長い髭を沢山生やした黒紫色の花序を年二回咲かせる。樹上にはサトイモ科の着生、攀縁植物が沢山着生垂下して居る。

### III 事務所付近

事務所輪道の内部と其西方池の間との地区で、輪道内の東側に片寄って事務所と腊葉館とがある。

事務所には図書館が附属し、図書約五千五百冊、別冊約五千部を蔵し、當園の出版物たる馬來農業時報及植物園時報二十餘巻もある。階上は実験室で馬來植物の顕微鏡的研究、蘭交配種子の培養を行って居る。腊葉館には数十年來多数の學者により採集されたマライ、スマトラ、ボルネオの植物腊葉標本、瓜哇、印度、其他との交換標本及び昭和十八年に入手した香港植物園所蔵の代表的標本一万五千枚を合わせ約三十万枚の標本が蔵せられ、馬來植物の研究調査検定には欠くべからざる基準をなし、半島随一の貴重なる標本館である。

事務所の周囲にはマライクチナシ、キダチノウゼン、コブサイカチ、ホザキマキ、ウラジロヤシ、ドリヤンの若木、オホキワタなどがあり、西方には肉豆蔻、ビリンビン、丁香、印度肉桂、黄金竹、グバンヤシ、扇椰子、孔雀椰子、扇芭蕉、其他近頃植ゑた珈琲、ココア、ココ、香水茅があり、北部には椰子が多く雲井椰子、ビラウ、ビンロウ、ニボン、チラシバヤシ、ミダレバヤシ、大王椰子、ハボタンヤシ、其他二十餘種あり、ビラウの一株には南米産のワニラが着けられてある。

肉豆蔻は桃に似た果実を着け実が割れると核の表面に紅い假種被があり之は核と共に香料として珍重される。丁香（チョウジ）は蕾から丁子油を採るが昭南では花が出来ず、彼南では上等品が産出される。肉豆蔻と同じくモルッカ原産で此地方は香料群島とも呼ばれ往時歐人羨望の的となり東亜侵略を助長させたのも此等香料植

物であった。グバンヤシは四十年位高く伸びてから頂上に花穂を高く出し開花枯死するが其前には幹から澱粉が採れる。扇椰子は昔印度で葉を短冊形に切って紙の代用としたもので其他籠などの編物にもなり繊維も採れ又花房の若いものからは糖液が採れ酒にもなり、ビルマ、タイでは今は主として之から砂糖を採って居るさうだ。孔雀椰子からも同様糖液が採れ又此椰子の葉鞘の外面の毛は火口になる。ワニラの果実からは香料を産するが当地では開花しない。

事務所の南方には、ソシクワ、アカシア、ユーカリノキの各数種、タマリンドウ、阿仙薬樹、更にマツ、ナギ、イブキ、コノデガシハ属など松柏植物が集められ、其所を過ぎて北に廻るとマライサラカ、トルーバルサムノキ、クス、ルカムなどがある。タマリンドウは葉花果実共に酒石酸を含み食用となり殊に種子間の莢肉は之を味噌の形にして調味料とし又は砂糖を加へてジャムとする。

輪道を越えた池の東側にはアソカ、マライアソカなどがあり、アリアケカヅラ、イカダカヅラのトンネルと柱シャボテン、フクロギ、セイロンベンケイなどの岩園がある。下手には三本の昭南樹が枝を横だへて居るのが目に着く。其他ライチー、南洋ナギ、マラカノキ、ランバイ、休屋の近くにはマンゴスチン、ニホヒネム、プタイ、クダワン、ギヤナ砲弾木と黒花夏藤のこんもり樹冠が見える。

アソカは無憂樹とも言ひ印度では日蔭樹とされ釋尊も此樹下で降誕されたのださうである。年二回黄後丹色となる花を開く。マラカノキはマラッカの地名を生んだ木で果実は球形黄緑色で甘滋味があり塩漬にされビタミンに富む。

### IV 池の上

池の東北斜面から茶亭附近と音楽堂手前の狸々椰子並木道下の段丘地一帯である。

池の近くには早魃の折に池水を苗圃へ送るポンプ場の叢があり其上方にはテリハカンラン、カユプテ、樹蘭、ハスノハギリ、ヂタノキ、ダマルノキ、金芙蓉、印度鉄木、オホバハマイチビなどがあり、茶亭下の路傍には印度素馨の花壇がある。カユプテは葉からシネオールに富む精油を採り歯痛其他に用ひる。樹蘭は開花時に四辺を匂はし、ヂタノキは樹皮を下熱駆虫に内用し、ダマルノキの樹脂はニス、松火、防虫等に用ひられる。茶亭から見下ろした池の景色は園内有数の眺である。

茶亭の手前にはサバルヤシ下奥の方へは岩鳳尾椰子の並木があり、斜面にはオクロジャ、ナンキンハゼ、癒瘡木、毒桐、タンパンノキ、茶亭の周囲にはロカム、テリハボク、ブニノキ、王冠木、シノブバギリ、大花テンブス、ミミテンブス、奥に下つてセアラゴムノキ、バルサノキ、それから変葉木とアカリハの花壇、腸詰木、交趾ピロウの並木がある。

ナンキンハゼは南支産で種子から蠟を採り、毒桐の種子は有毒であるが所理して食用に供せられ、タンパンの果実は煮て食用になり、ロカムは甘酸味のある果実を年二回生じ、ブキノキは房スグリの様な果穂を垂れジャムになり、大花テンブスは毎年六月頃径一尺位の白色厚肉の花を咲かせる。寄生植物のラツフレシヤを除けば熱帯では此花が一番大きい。ミミテンブスの花も之を少しく小さくした形で交趾ピロウの一本には之が着生植物としての生長を始めて居る。また鳳凰蘭が着生して大きい巢を作って居る幹もある。パルサの材は軽いので有名で浮木などに用ひられる。

段丘地は上下三段となり茶亭の方から道に沿ふて下方へ行くとオホフトモモ、ヨルバアキ、ホザキマキ、マライフトモモ、芝地へ出るとインドナツメ、チャンパカ、血木、ビハバイヌビハ、クリシナボク、印度魚木、ブラジルキワタ、シュリナムタデノキなどがある。フトモモの類は果実が食用になり、ヨルバアキは若葉から藍が採れ、ホザキマキは馬來山地の松柏の一である。チャンパカは香気の高い花を咲かせて頭髮に飾られ、年二回の主なる花期の外少しは大抵何時でも見られる。クリシナボクは漏斗状の葉を着ける畸形のイヌビハである。

中段は整形形式な歐風花壇で煉瓦を敷詰め矮形な葉雞頭で縁取り、両端には鳳凰木、インドソケイ、タコノキなどが植わり、上段には夾竹桃、アフリカマツリ、鳳凰木などの花壇、タイソテツ、黄焰木などもある。鳳凰木は昭南では九ヶ月内外で落葉し新葉と共に赤い花を咲かせるが前季の莢も着けて居る。

## V 音楽堂附近

音楽堂は海拔一〇九尺、東北には原始林が高く繁り、西南にはサルタナや西兵營の丘陵に對して居る。堂を中心として内外両輪道があり東南は狸々椰子の並木道迄三角に伸び出して居る。

此三角部には大道に沿ふて黄焰木、アカマメノキなどがあり、黄焰木は年二回黄色い花穂で樹冠を被ひ、アカマメノキは年中丹色の種子を路上に散して居る。中の芝地にはストロファンツの叢と印度素馨の種々な種類がある。ストロファンツは利尿強心剤で種子が殊に有効であるが当地では結実しない。印度素馨には葉の尖つたのと円いのがあり花は白黄と紅のものがあり夫々大小がある。花は香気強く落花の後も馥郁たるものがある。種類によっては一時殆ど落葉するが大木には年中花の絶えぬものもある。

其上の堂の東南部に当る所は道路から三段になり路傍にはノレンヤシの並木、石段を上ると右の花壇にはハリマツリ、風蝶木、ベニバナブラシノキ、下縁にはトベラ、ヘンナ、ニトベギク、ベニヘンナなどの灌木類、中央には矮性狸々木と金芙蓉が二本立って居る。更に石段を上って印度使君子の棚をくぐると南洋油桐数種と鑑賞用灌木類があり、中央には大花ミサヲノキ数株、空色のアフ

リカマツリやヒメルリヒルガホの花壇、右には年中花の絶えぬ赤いトウロウフヨウ、左は鑑賞用蔓莖と草花のトンネル。

ハリマツリは花が青く実はフサスグリの様で黄色いがサポニンを含み有毒である。ヘンナは花は匂ひ葉は爪や毛を赤く染める。印度使君子は果実は駆虫剤として有名であるが当地では美しい花を見せる丈である。南洋油桐の類は種子は有毒であるが油が採れる。大花ミサヲノキは毎年三回位大きい花を皆揃って咲かせる。

次に音楽堂の西南部に移ると中央に久邇宮朝融王御手植の青鬱木、南洋濱オモト、紅ハマオモト、マクロザミヤ（濠洲産ソテツ科）、セイタカヤシ、ハボタンヤシ、ボタンヤシ、花壇にはドンベヤ、オホバモクキリン（サボテンの祖先形）、ソシンクワ、ランタナの種々な品種、石段の所にはユリグルマ、ホノフカヅラの棚があり、其所を下るとバルレリヤ、スヒカヅラ、アガファサンイウクワ、マウリンクワなどがありシロバナノウゼンカヅラの蔓棚から外輪道へ下ると路傍に沿ふて蔓莖の観賞植物の間にサルナンカ、オホバスハウギ、シマボウなどの樹木があり、サルナンカの種被は食用になり、オホバスハウギは二年半に一回、シマボウは年二回落葉する。

音楽堂の北西部の外縁に沿ふてはアメリカニガキ、ベニヤコブサウ、ミムソノキ、ナンヨウウコギ数種、ココノキ、中央にはイカタカヅラの大叢、キダチノウゼンの円花壇がある。

東北部は外輪道の方へ低い斜面をなし原始林を切開いた跡であつてクハガタノキ（ジルトン）、ケンパスなどの高い木は其まゝ残つて居る。其他カボク、花焰木、印度提菩樹、ハネバマキ、南洋クリガシ、トゲミガシ、クリミヤ、ケマンドなどが立ち、北の低所には日本産の竹類が植ゑられ、南の方には灌木や草花の花壇もある。花で目珍しいのは内輪道傍の勳章花で葉縁が平面に融合して記事の様な形になって居る。

之から更に内輪道の外縁を東南から右廻りするとヒメマキ、大花猿滑、南洋カイコウツ、南蛮サイカチ、金香木、銀香木などがあり、大花猿滑と南洋カイコウツは花実の季節が木により夫々違ふ。前者は種子は赤黒抱会ひで相思樹に似て居り、後者は花が黄色で藤の穂の様に垂れ果実は丸い棒を下げた様で莢内種子の肉は甘味があり緩下剤となる。

## VI 蘭室附近

音楽堂東下の低地で園の東側中央部である。音楽堂から草花を陳列した石段を下ると蘭や観葉植物を集めた植物室があり、入口にはシカツノシダの大きいのが懸かり、中には天南星科、棕櫚科、羊齒類其他の観葉植物、水草、馬來産小形蘭科、ウツボカヅラなどゝ共に咲き揃った蘭花が毎週入換へて陳列されて居る。又屋根には美しい蔓花が匂ひ上り、入口の前の水槽には黄花オモダカ、水オジギサウ其他の水草と南洋油桐などの鉢植がある。

蘭室の南の低地には南洋マサキ、路傍には大王ヤシ、葉ボタンヤシなどが立って居る。此兩種はよく似て居るが小葉を見ると前者のは立体的に乱れて出で後者のは平面的に出で居る。

蘭室から北へ行くとジャングルになり其奥には硝子室と苗圃があり種々な若木の鉢植が置かれ此等はやがて園内各所へ植栽せられるのである。更に奥へ進むと東口近い所で原始林道に出で此道を南へ行くと音楽堂の北側へ抜けるが、其角の所にヘラシマボウの大木が廣く板根を張ってるのが目立つ。此木は毎年十月頃から落葉し始め四月前後落葉し終ると間もなく新葉が出揃ふ。此木の奥には方々小徑があり薑科其他林下の陰生植物が生へて居る。

## VII 西門附近

音楽堂の西方西門の周囲の部分で、西門道の東西両側は砂糖椰子と大花キササゲの並木、其左右は菜園とジャングル、北側は宿舍道路と猿小路に界され、南東部は音楽堂の丘の開けた斜面の一部をなして居る。又、有用植物園の門は之と向ひ合つて居る。

菜園には胡瓜、茄子、隠元など温帯にもある野菜の外、タピオカ、食用カンナ、大山芋、ローゼル其他季節により種々な蔬菜類が栽培せられバナナ、パパヤも種々あり、また寺内、齋藤〇〇將軍の記念樹もある。将来有用植物園が完成すると此所は丁度両園の中心地となるべき所である。

五道辻の中央には狸々椰子の叢が立ち、之から左方宿舍道路に沿ふてはカンラン、ミムソノキ、包葉木などがあり、右方にはホソバイヌビハ、鳳凰木、ロダムノキなどがあり、猿小路から右へ折れると音楽堂の外輪道となり、其所から西門へ下る道側に本園第一の高樹クハガタノキがある。幹が三本に分れ周囲〇〇米高さ約五十米で大体年二回落葉し、樹皮の乳液からはチューイングガムが出来る。西門の近くには瓔珞木が二本あり赤い美しい大きな花房を垂れて居る。

## VIII 北門附近

五道の辻から北へ原始林の西縁に沿ふて行くと北門へ出で、其左の椰子谷道を降ると北西の椰子谷口へ抜け、次の宿舍道は行止りとなり、一番左は西門道である。

椰子谷道の左手には稍々小高く岩園がありシャボテン、フクロギ、龍舌蘭等の多肉植物が生えてゐる。北方は緩く傾斜した椰子谷で、手前左の宿舍道の下にはカヂウ、マンゴスチンなどの果樹、北門道を行って間もない左下にはグタペルチャノキ、キヤニモモなどがあり、谷の両斜面の芝地には世界各地の椰子類約百種が集められて居り、此外有用植物も少くない。

椰子谷口の手前右側には菜園がありバヤム、カンコン、ツルムラサキ、ハゼナ、チコルマニス其他熱帯蔬菜類が栽培せられてゐる。椰子谷東方の原始林には二百余種の樹木と種々な蔓莖、灌木、下草などがある。

## IX 宿舍附近

宿舍二棟を中心とした丘陵地で、第二宿舍の北斜面には草花苗圃があり其所を下ると小徑がある。此路は椰子谷口の門に近い所から園の北西垣根に近く沿ふて迂廻し、第一宿舍路へ抜ける環状路をなしてゐる。此地區には外国産の有用植物が多い。

両宿舍道の中間地区にはシンドラノキ、ミムソノキ、ヂタノキ属などの樹木がありヒシアフギといふ原始的な椰子、油椰子の並木などがある。第一宿舍の近くにはブラジル鉄木、蘇木、其奥には珠数の木、犬マンゴウ、珈琲数種、ワニナシなどがある。尚ほ蘭の栽培所があり馬來、東印度産のみならず南米、アフリカ産のもの及び人工雑種のものも多数育てゝ居り、此内開花したものは蘭室に移し毎週取換へて観覧に供してゐる。

小徑の西北側垣根との間にはククイノキ、ラフィヤヤシ、印度鉄木、サテンノキ、支那サイカチ、ヒマノキ、サラ双樹、ペギアグリ、コラノキ、マチンなどがあり、小徑の内側には南から行って大風子、台東漆、グネモンノキ、チク、マタクチン、ハマイチビ、バンジラウ、サボンムクロジ、ナムナムノキ、ブラジルグリ、ベルノキ、スアリグリ、イヌマンゴウ、太平洋栗、ワンピ、ドリヤン、ストロファンツスなどがある。

』

## 引用文献

- 早田文蔵 (1910) 欧州紀行 (承前) 第二、香港ヨリシンガポールに到り。植物學雜誌, 24(280): 147-153.
- 芦田譲治 (1943) 郡場博士業績目録。植物学雜誌, 57(674): 102-103.
- E.J.H.Corner (1946) Japanese men of science in Malaya during Japanese. Nature, 158: 63.
- Anonymous (1947) The Singapore Botanic Gardens during 1941-46. Gardens' Bull Singapore, 11: 263-265.
- 郡場寛博士古稀記念論文集 (1952) Biographical Sketch of Dr.Kwan Koriba, pp.3-4.
- 郡場寛先生遺稿集刊行会 (1958) 著作目録。郡場寛先生遺稿集, pp.278-282.
- 山内智 (2009) 植物学者郡場寛博士の履歴 (1) 青森県立郷土館研究紀要, (33): 28-34.
- 山内智 (2010) 植物学者郡場寛博士の履歴 (2) 昭南植物園。青森県立郷土館研究紀要, (34): 19-26.